

ポストヒューマニズムと教育の未来：基本概念と教育学への示唆

法政大学教授

坂本 旬

■はじめに

ソーシャルメディアの登場は社会に大きな影響を与えつつある。教育にとっても大きな問題であることは間違いないが、教育学はこの新たな課題にどのように対応すべきか、いまだ模索が続いている。さらに生成 AI の登場は、問題をより複雑なものにしつつある。果たして、これらの新たなテクノロジーの登場は、教育のあり方をどのように変えるのだろうか。また、教育はどのように対応すべきなのだろうか。この議論の鍵を握るのが人間中心主義を乗り越えて、動物などの地球全体の生態系、そして非生命体を含むエイジェンシーの関係性に焦点を当てるポストヒューマニズムだと筆者は考える。それはおそらく、人間中心主義を土台として形成されてきた教育学そのものを根本的に変えてしまう可能性がある。

そして、もう一つの懸念は日本の教育政策における教育学の支配である。社会のデジタル化が進むにつれて、EdTech を背景とした教育学が教育政策に占める位置が大きくなり、今日では日本の教育政策の根幹に影響をもたらしているように見える。本来こうした潮流に対抗すべき教育学は、教育におけるテクノロジーを無視するか、あるいは「反デジタル」の狼煙をあげることでまっとうしており、説得力のある議論をすることができないように思われる。一方、教育学は圧倒的に男性中心であり、ジェンダーバランスについては意識すらされていないように見える。これは組織的な問題というよりも、教育学そのものが有している男性中心主義に基づくものであろう。残念ながら、今日まで教育学はこうした問題に触れてこなかった。このような問題もまた、ポストヒューマニズムをめぐる議論と関わっている。

筆者は昨年「デジタル時代のシティズンシップと未来」および「子どもの学びと AI」と題する論考を執筆した。この論文を執筆している現在、これらの論考は未公開であるが、いずれもポストヒューマニズムを扱っている。前者の論考は、ソーシャルメディア倫理をテーマにした書籍の一章として執筆したものであり、もともとポストヒューマニズムをテーマにした論考ではなかった。同論考が下敷きにしたのは、昨年 3 月に公開した「陰謀論に対抗するためのメディアリテラシー教育原則」であり、それに加えて ICT 教育における道具主義批判の視点を加えた。とりわけ、筆者が問題にしたのは、人間と道具を切り分けて考える見方であり、もうひとつの重要な視点がダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」であった。

ハラウェイのこの論考は 1985 年に書かれたものであり、当時のフェミニズム思想に大きな影響を与えたとともにポストヒューマニズムの形成に寄与するものであった。我々はすでに機械と人間のハイブリッドであるという彼女の宣言は、当時流行していたサイバーパンクの影響を受けたものなのだろう。しかし、今改めてこの宣言を読み直すのだろうか。常にスマートフォンを手放さず、スマートウォッチを身につけ、ネットワークに接続されている有様は、サイバーパンクが描いた世

界観に大きく近づいているとは言えないだろうか。それどころか、サイボーグという用語はすでに医学用語となっており、脳神経と機械を接続し、脳によって直接機械を作動させることもはや現実のものとなっている。40年前の未来は今の現実である。

ハラウェイの世界観に埋め込まれた倫理を問うことは、筆者に求められたソーシャルメディアの倫理の考察に大いに役立つであろう。筆者の考察の出発点はそこにあった。しかし、ハラウェイの思想はそれ以上の意義を有していたのである。それがポストヒューマンズムである。ポストヒューマンズムはポスト構造主義におけるフーコーやデリダなどの反ヒューマンズムの系譜を引き継ぐとともに、多様な領域で広範に形成されていった思想及び理論であり、ハラウェイはフェミニズムの視点から、それらを焦点化し、後の批判的ポストヒューマンズムと呼ばれる理論的潮流の基盤となった。筆者の論考「デジタル時代のシティズンシップと未来」は、その入り口までを記述したものであり、まさにその地点にたどり着いたところで終わっている。実際、ポストヒューマンズムと教育学の関係を理解しようと思うならば、哲学、芸術、動物学、環境学など多様な学問領域にまたがるポストヒューマンズム理論の潮流を紐解く必要がある。

筆者の論考「子どもの学びと AI」は、ポストヒューマンズムの視点から AI と教育の関係を述べたものであるが、1 万字という制限があったため、問題提起にとどめている。生成 AI の登場はポストヒューマンズムにおける議論に大きな影響を与えつつある。ポストヒューマンズムでは、人間と非人間の境界を問い直すのが、生成 AI の振る舞いは非人間存在のエイジェンシーとしてみなすことができるからであり、人間と生成 AI との関係を問うことは、ポストヒューマンズムの議論の一つの大きなテーマとなっているからである。

この論考では、ポストヒューマンズムはユネスコの議論にも影響を与えつつあることを取り上げている。ポストヒューマンズムは、人間中心主義が西欧白人男性主義であることを暴き、周辺化された人々に目を向けさせるとともに地球全体の持続可能性をめざす思想である限り、ユネスコにとっても無視することができないからである。この論考は、白梅学園大学子ども学研究所が発行する『子ども学』第 14 号のために書いたものだが、『子ども学』第 13 号はまさにポストヒューマンズムがテーマであった。このことは、ようやく日本の教育学においてもポストヒューマンズムに関心が向きつつあることを示していると言えるだろう。

本稿は、ポストヒューマンズムの概要を示すとともに、教育学との接点を考察することによって、ポストヒューマンズムが教育学にどのような影響をもたらすのか、その可能性を明らかにすることを目的とする。ただし、そのためには数多くの議論を検討しなければならない。まず、ポストヒューマンズムの定義を行い、筆者の研究の出発点となったハラウェイの「サイボーグ宣言」、ローザ・ブライトツィの「ポストヒューマン」論およびバラッドの「エイジェンシャル・リアリズム」論を取り上げ、その教育学的意味を検討する。そして、最後に日本の教育学におけるポストヒューマンズムの受容について検討する。

■ハラウェイとサイボーグ

ポストヒューマンズムとは、近代が形成してきた「人間」を中心とする思想（ヒューマンズム）を問い直し、人間と非人間、すなわち動植物や環境、テクノロジーなどとの関係性に焦点を当て、その再構築によって、人間であることの意味を問い直す思想潮流と言えるだろう。ポストヒューマンズムの源流を辿るならば、構造主義からポスト構造主義に至る思想・哲学の影響を抜きには語れない。ミシェル・フーコーが『言葉と物』（1966）の中で、人間の始まりと終焉について語ったことやクロード・レヴィ＝ストロースが『人種と歴史』（1952）や『野生の思考』（1962）で西欧白人男性を中心とするヒューマンズムを批判し、「人間」の確立ではなく、「人間」の解体を目指したことはよく知られている。また、ジャック・ラカンは『エクリ』（1966）で、自己同一的で透明な主体を前提とするヒューマンズムを批判した。

さらに、ルイ・アルチュセールは構造主義的マルクス主義の立場から、人間主義を批判した。その主張は1968年のインタビュー記事にわかりやすく表現されている。アルチュセールは、用語に対する質問の中で次のように答えている。

人間主義（ユマニスム）という言葉は、プロレタリア階級にとっては真実で重要なもう一つの言葉、すなわち階級闘争という言葉は打倒するために、つまりそれを殺すために、それを利用するブルジョア・イデオロギーによって用いられているからです。……マルクス主義の伝統はすべて、歴史を作るのは《人間》であるということを拒んできた。なぜか？ なぜなら実際には、したがって事実としては、この表現は、プロレタリア階級にとっては真実で重要な他の表現、すなわち歴史を作るのは大衆である、という表現を打倒するために、つまり殺すためにそれを利用するブルジョア・イデオロギーによって用いられているからです。

(Althusser, 1968=1975:182)

アルチュセールは独自のイデオロギー論をもとに、ブルジョア・イデオロギーによって人間主義が階級的利害関係を覆い隠してきたと主張する。アルチュセールの反人間中心主義の特徴は、『資本論を読む』(Althusser & Balibar, 1968=1974) によって、初期マルクスの『経哲草稿』と後期マルクス『資本論』の間の認識的分断を明らかにし、それによってマルクス主義から人間中心主義を明確に分離したことである。アルチュセールの反人間中心主義的なマルクス主義はその後のフェミニズムに大きな影響を与えるとともに、フェミニズムもまた、構造主義的マルクス主義の欠陥を克服する道を進むこととなった。ハラウェイは「状況に置かれた知」に関する論考の中で次のように書いている。

人間主義的なマルクス主義は、その源泉において汚染されていた。というのも、マルクス主義は、人間が自己を構成する過程で自然を支配するという存在論的な理論を形づくっていたし、さらには、これと密接に関連して、女性の行ってきたことがらのうちの賃金不適合とされてきたことがらのすべてに関して、それを歴史化する能力を欠いていたからである。しかし、依然として、マルクス主義は、客観的見方についての我々なりの教義を模索する立場として、フェミニストたちの認識論的な精神衛生上、有望な源泉でありつづけた。マルクス主義という出発点は、我々なりの各種の立場論に到達するためのツールの数々、たゆみない具現化作業、実証主義や相対主義によって力をそがれてはいない豊饒なヘゲモニー批判の伝統、そして媒介行為についての陰影のある理論を提供したのである。精神分析のいくつかの潮流、特に、英語圏の対象関係論は、こうしたアプローチにはかりしれない影響を及ぼした。対象関係論は、ある時期、マルクスやエンゲルスの手になる著作をさえ凌ぐ影響を、アルチュセールをはじめとするマルクスやエンゲルスの衣鉢をついでイデオロギーと科学という主題を取り扱ったと標榜した者たちは言うに及ばず、米国の社会主義フェミニズムに対しても及ぼしたのではないかと思う。(Haraway, 1991=2000:356-357)

ハラウェイはアルチュセールの反人間主義を肯定的に受容するが、同時にマルクス主義がジェンダーに関わる問題への批判に辿りつかなかったことを批判する。この問題はフェミニズム運動自体の問題でもあった。ハラウェイは「マルクス主義事典のための『ジェンダー』」の中で、「第二波フェミニズムの初期には、自然／文化という二元論的な論理構成に対する批判や、その弁証法版である、「人間」による「労働」を介した「自然」の支配、領有もしくは媒介というマルクス主義的な人間主義の物語りに対する批判が行われた。しかし、批判の矛先が、そこから派生した性（セックス）／ジェンダーの区分にまであえて向けられることはなかった」と述べている (Haraway, 1991 = 2000:255) 批判の矛先が性（セックス）／ジェンダーの区分に向かわなかったのは、フェミニズムに対する生物学的決定論的批判に対抗するためには、この区分が役に立ったからである。しかし、この区分は「自然／文化という二元論」に依拠しており、そこには理論的な限界が存在する。ハラウェイは「本質的アイデンティティとしての女性ないし男性という図式は、分析されることもなく、政治的に危険な状態のまま放置されることとなった」と指摘している (Haraway, 1991 = 2000 :255) 。

ハラウェイの「サイボーグ宣言」はまさにその新たな思想的枠組みを示したのである。ハラウェイは「サイボーグ宣言」の冒頭で「我々は皆、キメラ、すなわち、機械と生体のハイブリッドという理論化され製造された産物であり、要するに、我々はサイボーグである」と書いた (Haraway, 1991 = 2000 :288)。このサイボーグとは一つのメタファである。この宣言が発表された 1985 年はサイバーパンクと呼ばれる SF のブームとパーソナルコンピュータの普及が始まる時期であった。実際、ハラウェイは後のインタビューの中で、この宣言の執筆に初めてコンピュータを使ったと述べている (Haraway, 2000 = 2007 :58)。宣言の最後に当時ハラウェイが読んだ SF について書かれているものの、テクノロジーとしてのサイボーグそのものについて語っているわけではない。(なお、「サイボーグ宣言」1985 年版と、その細部を修正した 1989 年版がある。本稿では後者から引用している。)

では、ハラウェイにとってサイボーグとは何だろうか。ハラウェイは「サイボーグは、ポストジェンダー社会の生き物」だと述べた上で、以下のように主張する。

サイボーグは、個を抽象的存在—あらゆる存在関係から最終的に切り離された、まるで宇宙に行った人マン間のような存在—として表現するという「西欧」のエスカレートする支配関係の黙示録的な究極目的 0 0 だったからである。「西欧」ヒューマニズム的な意味での起源物語りは、起源の一体性、充足、喜び、恐れといった神話に基づいており、こうした神話を体現するのが、男根的母という、すべての人間がそこから切り離されることによってしか生まれえなかったような存在である (Haraway, 1991 = 2000 :289)。

また、別の箇所では「ある種の自己解体・再組み立てされ、集合的・個的であるようなポスト近代の自己である。こうした自己こそ、フェミニストたちがコードする必要のある自己である」と書いている (Haraway, 1991=2000:314-315)。すなわち、サイボーグとは、近代が創り上げてきた白人男性をモデルとする「人間像」に対抗する存在として、具体的には「有色女性」などの「アウトサイダー・アイデンティティ」をイメージして描かれているのである (Haraway, 1991 = 2000: 333,336,337)。

とはいえ、パーソナルコンピュータの普及に代表される社会の情報化の動向と無縁だったわけではなく、その動向に深い関心を示しながら、白人男性をモデルとする近代的個人を超克する新たな人間のモデルとしてサイボーグを選んだことは間違いない。そしてハラウェイはそのモデルを通して「サイボーグのポリティクス」という概念を提唱する。サイボーグポリティクスは「男根中心で論理中心主義のセントラル・ドグマに挑む闘い」であり、これは「大文字の男性と女性に混乱を持ちこむような接合のしかたであり、欲望—ことばやジェンダーを生成する存在として想定されているカーの構造を覆し、ひいては自然と文化、鏡と目、奴隷と主人、からだと心といった「西欧」アイデンティティの再生産構造やモードを覆す」ことを意味するという (Haraway, 1991=2000:337)。その上で、「科学やテクノロジーを考え、支配の情報工学に挑戦して、強力な活動を行ううえでの一つの方策を基礎づけることになるであろう神話の体系」の存在を肯定する (Haraway, 1991 = 2000 :346)。ハラウェイは「支配の情報工学」という用語を登場させる。そして、情報社会の進展とともに、資本主義はテクノロジーの革新を通して、「心地よい旧来の階層的支配から、支配の情報工学と私が称する身震いするような新しいネットワークへの変遷」 (Haraway, 1991 = 2000 :310) をもたらすと警告する。ハラウェイはいう。「支配の情報工学は、不安がいちじるしく増幅され、文化が疲弊し、最も傷つきやすい者が生存するためのネットワークが常に欠落しているような状態としてしか描写のしようもない」と (Haraway, 1991=2000:329)。こうした現実には、今日の教育現場にすでに存在している。EdTech に代表される ICT 教育における道具主義は、数値化を通して周辺化された人々の声をかき消してしまう。それが今日の教育工学の姿である。例えば、ロメロ・ホールらは、インストラクショナル・デザインの現場に対して、「学問の実践を規定する支配的なパラダイムによる男性主義的言説は、学問の世界において女性をさらに疎外し、周縁化することを目的とする複数の性差別的な形態をとりうる」と指摘している (Romero-Hall et al., 2018) 1。このような状況に対して、ハラウェイは「我々の身体を創造しなおすうえでは、コミュニケーション・テクノロジーとバイオテクノロジーが必須のツールとなる」

(Haraway,1991=2000:315) という。その意味で、サイボーグは、新たなテクノロジーが支配する情報資本主義の抑圧への抵抗のメタファーなのである。ハラウェイはこの宣言の最後に次のように述べている。

サイボーグのイメージは、私たちが自分の身体や道具について説明してきた二元論の迷路から抜け出すことを示唆してくれる。これは共通語の夢ではなく、強力な異教徒の異言語の夢である。それは、新右翼のスーパーセイバーの回路に恐怖を与えるために、異言で語るフェミニストの想像力である。それは、機械、アイデンティティ、カテゴリー、人間関係、空間の物語を構築し、破壊することを意味する。(Haraway,1985=2006:147)

ここで語られているのはサイボーグのイメージであり、具体的には「有色女性」に代表されるマイノリティである。このようなハラウェイの主張に対して、巽孝之はアメリカのフェミニスト歴史研究者のジョアン・スコットの批判を紹介する。すなわち、左翼系白人女性がマイノリティ・女性労働者に託すロマンティズムと変わらないのではないかという批判である。さらに、社会主義フェミニズムへの吟味不足や科学技術決定論気味である点も批判の対象となる。これに対して、巽はハラウェイの主張のポイントは、「遺伝子が進化機械を作り貨幣が資本主義社会を築くことの間アナロジー以上のものを見出すこと。ひいては、後期資本主義社会における社会生物学の可能性を、人間のみならず霊長類社会全般に通底する制御・抑圧システムとしてのサイバネティクスに看破すること」だと述べている(巽、2021:270)。

つまり、ハラウェイは貨幣 = 社会を制御するコードと遺伝子 = 進化を制御するコードの類似性を指摘するだけでなく、それ以上の可能性について語っているというのである。巽の言う「後期資本主義社会における社会生物学の可能性」が「人間のみならず霊長類社会全般に通底する制御・抑圧システムとしてのサイバネティクス」へと向かうということは、人間のみならず、地球規模の生態系全体の統制へと向かうということである。人間がそれを意図しようとしまいと、資本主義自体にそのようなシステムが内在されている。遺伝子工学は人間のみならず動物・植物・微生物・ウイルスに広く応用され、医療・農業・畜産・環境分野で研究開発が進められている。しかし、クローン技術の人間への応用や遺伝子操作によって「人化マウス」のように、人間(ヒト)と動物の境目が曖昧になるなど、数多くの倫理的な問題が生じている。このような進歩は一方では、人間に多大な恩恵を与えるが、同時に資本主義システムはこれらの技術の特権階級が商品化し、支配することによって、人間を含むあらゆる生命と生態系をそのシステムに取り込まれてしまうだろう。

サイボーグというメタファーは、このような遺伝子工学を含む情報工学を土台とした資本主義システムによる生態系全体への制御支配への抵抗のメタファーであり、支配階級から排除される—とりわけ有色女性に代表されるような複数の被支配的特性をもつ—マイノリティがラジカルな反テクノロジーに陥ることなく、抵抗する視点をもたらしたものだと考えられる。ちなみに、小谷真理はハラウェイが用いた「有色女性」がシリコンバレーで働く有色人種、とりわけメキシコ系黒人女性を指していると述べている。彼女たちは二重の抑圧構造のもとにいつも、「産業構造の変化にともなって複雑な抑圧構造を遂げる世界でサバイバルしていくためのさまざまな戦略を行使する存在」だという(巽、2001:315)。このことはハラウェイのイメージする「サイボーグ」がどのようなものなのか、示唆するといえるだろう。

とはいえ、本稿の冒頭に書いたように、私たちは1980年代ではなく、2020年代を生きており、サイボーグをめぐる社会的情報は大きく変化している。コペンハーゲン大学のニルuppは、「精神的なサイバネティクスを部分的に研究するサイボーグ人類学の分野に目を向けると、スマートフォンは実際に私たちの接続能力を拡張し、私たちの接続性は現代社会の不可欠な一部」となっており、「これらのデバイスによって手の届く範囲(能力)を拡張しても、私たちは依然として人間であり、サイボーグとみなすことができる」と指摘している(Nyrup,2016:14)。すなわちデジタルテクノロジーの進化に伴い、サイボーグが暗喩するのは「有色女性」であるだけでなく、スマートフォンの利用者、とりわけミレニアム世代以降のデジタルネイティブと呼ばれる人々である。では、ハラウェイの思想はどのように受け継がれていったのだろうか。ハラウェイ自身は、2016年に行われたインタ

ビューの中で「ポストヒューマニズム」について語っている。まず彼女は「ポストヒューマン」という用語を否定する。この用語は「口語的には強化された宇宙人種やポスト宇宙人種タイプの人間、つまり人類の最終的な軌跡のために惑星外に出て行くような人間を意味するので、まったく役に立たない」という。一方、「ポストヒューマニズム」はまったく別のものを意味すると指摘する。それは「ひどく複雑な歴史を持つヒューマニズムの歴史、意味、可能性、暴力性、そして希望への検証や探求を示すもの」という（Franklin, 2017:2）。しかし、ハラウェイ自身は「ポストヒューマニズム」の理論にとりわけ関心を示したわけではなく、むしろ否定的でさえあった。フェミニズムの立場からポストヒューマニズムの理論構築にもっとも大きな影響を与えたのはロージ・ブライドツティである。

本原稿は以下の原稿の一部である。全文については以下の URL を参照のこと。

2026（坂本旬）ポストヒューマニズムと教育の未来：基本概念と教育学への示唆、法政大学キャリアデザイン学部紀要(23)、pp.145-168

https://www.academia.edu/164642342/%E3%83%9D%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%92%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%82%BA%E3%83%A0%E3%81%A8%E6%95%99%E8%82%B2%E3%81%AE%E6%9C%AA%E6%9D%A5_%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E6%A6%82%E5%BF%B5%E3%81%A8%E6%95%99%E8%82%B2%E5%AD%A6%E3%81%B8%E3%81%AE%E7%A4%BA%E5%94%86_Post_Humanism_and_the_Future_of_Education_Fundamental_Concepts_and_Implications_for_Pedagogy

<執筆者プロフィール>

専門分野：教育学、図書館情報学、メディア・リテラシー

所属：法政大学キャリアデザイン学部教授、法政大学総合情報センター所長

学位：教育学修士 東京学芸大学

主な著書：『デジタル・シティズンシップ』（大月書店）、『メディアリテラシーを学ぶ』（大月書店）など